

『無の神学』を読む⑩ 第二部 無の神学への道
『無の神学』第二部 第2章 「天路」

2003年2月23日（東京 新宿）

奥田 昌道

歳をとるのは素晴らしいこと 『無の神学』総序 神の実存体たるイエス 第二章 天路 「はじめに」 二つの岐路 第三の路 罪びとの首 信仰の本質 旧約の預言者 預言者の信仰的実存 終末的現実 私の孫の翔の姿 天路

●歳をとるのは素晴らしいこと

私は今年の9月28日で満70歳になります。歳をとるというのは素晴らしいことですよ。本当にゆとりをもってものを見ることができまし、いろいろな今まで自分を縛っていたこの世の事とか、精神的な事も含めて、それが今どんどん解けていきますので、本当に自由にされます。それから、私の場合は、内側から活力が湧いてきますので、肉体的にも非常に若々しい気持ちであります。キリストに在って、もつと言いますと、キリストの御霊をいただいで、歳を重ねるということは素晴らしいことです。それには、一つだけ条件があります。自分をお委ねするということです。自分を全くお委ねすれば、ひとりで道は開けていく。大事なことは、さきほど司会者が言いましたように、

「今日二日の自分の自由時間を、どうぞ、いかようにもお使いください」

と祈る気持ちです。自分の人生というものはもう自分のものではありませんからと。

私は実に最近、不思議なんです。裁判所を辞めまして、一時体調を崩しましたけれども、それが回復するにつれて、いろんな所からいろいろ用いられて、昨日もある方とお話ししながら言ったんです。講演を頼まれたり、いろんなことを頼まれたりすると、その時は「はい、はい」と引き受けて、準備をして二日前に必ず後悔すると。

「なぜ、こんなことを引き受けたんだろう、お前はバカだな。もう堪忍してくれ」

と、自分がいやになる。そして、当日を迎えて、それで非常にいい結果というか、うまくいくわけですね。

「ああ、ありがとうございます」

と。だから、全然、自信満々なんて絶対ありえない。二日前に必ず後悔してますからね。それがいいんだと思いますよ。そういうことなんですけれども。

それは公の事であろうと、またプライベートに偶然に人にお目にかかることであろうと、何であろうと、本当に私には今もう、キリスト・イエスさま、天界のキリスト・イエスさまが私にピタッとくっついて、私を通して働いてくださるということがわかるんですね。



何だか神懸かりみたいなんです——全然そうじゃないんですよ(笑)、そんな御告げがあるわけでも何でもないんだけど——私に会ってくださった方は、そのあとで漏らされる言葉には、

「非常な平安をいただいた。何か心の中が澄みきった思いになった」とか、何かそういうことを後から仰る。

「ああ、そうだったのか。主さま、ありがとうございます」と、そんなことですね。

よく御霊のことを小池先生が仰います。もう小池先生なんていうのはいつも御霊を感じておられた方ですから、いつも祈っておられた方ですから。

私は一回、数年前に面白いことがあった。人間ドッグに入って心電図をとる時に、私は寝台の上に寝ながらキリストのことを考えたら、ピクツと動いたんですね。そしたら、心電図がバツと動いた。医者が、「今、何かありましたか？」と。「いや、すみません。祈りました」なんて言えんから、それ以来、私は心電図をとる時には何も考えないことにしました。時々、お風呂の中であろうと、寝床の中であろうと、キリストのことを思っていると、体がピクピクと動くことがあるんです。まあ言うならば、それが私にとつてある種の御霊との何か交流かもわからない。その程度のことなんです。でも、確かにキリストが物凄く私を捕まえて、お用いくださっているということが段々ハッキリしてきておりますね。そうしますと、キリストがヨハネ伝で、

「私は御意にかなうことを行っているから、決して私を一人ぼっちにはなさない。いつも一緒にいてくださる。」

というヨハネ伝の言葉がありますけれども、私は決してそんな御意にかな適うことを行っているかどうかわかりませんが、気持ちとしてはもう私の人生は、

「主さま、あなたがいいようにお使いくださいませ。あなたが、あっちへ行けと仰つたらそこへ行きますし、こっちへ来いと仰ればそっちへ行きますし。常に白紙で、

白紙に全部お任せしております」

と。そういう気持ちでおりますと、必ず三日前には後悔することがあっても、必ずその主が計画されたことは美事に成っていくということを味わっていますので、皆さん、歳をとることを恐れないで、歳をとればとるほど本当に自由にされるんだと。外なる人は破れていても、枯れていても、内なる人は益々盛んになる。そのコントラストが素晴らしいということ、どうぞ覚えていてくださいますよ、歳をとることを恐れられないでください。

それからもう一つ言えますことは、やっぱり私はずっと若い時から体を鍛えてきました。いくら御霊の人であつても、体を鍛えてなかつたら、そこまで御霊は代りをしてくださらないと思う。やっぱり日頃から体を鍛える。私はランニングなんかをやりますけれども、ランニングが向いてない体の方はウォーキングをやるとか。とにかく、体を動かすことを厭



わなないで——時間を節約する時にはタクシーに乗りますけれども——時間がある時はしっかりと歩きとか。そういう形で自分自身を絶えず、

「こつでもこつでもお遣わしてください」

と言うからには体が動かないといけません。ひとつお呼びがかかったら、パッと走り出すという、そういうふうに関心自身を、これは喜びをもって、そうやって自分を備えてくださいね。

人間というのは、「心・技・体」と言います。心、それから技というのは技能ですね、プロとしてのいろんな働きがそれぞれの人にあります。それから、それを支える体。そしてもう一つ、霊。御霊という一番深いところで私たちを支え導き、全うしてくださる方の導きを受けるといいます。何だかそのことが徐々に徐々に私には分ってきたような気がします。小池先生が仰っておられたことが、

「ああ、なるほど、こういうことか。ああいうことか」という、そんな感じですね。

●『無の神学』総序

今日は『無の神学』を読む」の第10回目ということになりますが、前回からこの第二部に入りました。第二部の第二章「天路」という所に入って、前回は途中までで終わりました。今日もう一度、おさらいを含めて、今日は完結編に持っていきたいと思っています。

初めての方もいらつしやいますので、ちょっと小池先生のこの『無の神学』の序文を見たいと思います。「総序」です。

《総序》

本書、第三巻『無の神学』は二部から成っている。

第一部は「無の神学原論」である。東洋人であり、日本人である私は、「無」という言が、無私、徹底、無常、空無、霊妙、絶対、深遠、鴻大、無量、無限等の概念と深い連関をもった内容を表現し得る言であると思つので、おのずから撰ばされたのである。

何よりもこの無が、宇宙的な霊的人格たるキリストを表わすに最もふさわしい言と思つたからである。

「宇宙的な霊的人格たるキリスト」、こういう言葉は今日やります第二部の始めの方には出てまいりません。第二部は、小池先生の辿られた神学的な思索の跡づけなんです。1950年に聖霊のバプテスマを受けられて、それからかなり大きく変わられる。先生自身は「ガラッと変わった」と仰るけれども、かなり大きく変わられます。その前と後で本当に違うんですが、その前の段階を私たちは今やっている。その前の段階ではこういう「宇宙的な霊的人格キリスト」という言葉は出てまいりません。これは後の先生の言葉です。



それゆえキリストを中心とした神学であり、聖書を主題とした神学ではあるが、所謂「聖書神学」でもなく、さりとて「組織神学」でもない。質的にはこの両者を超包する。

聖書は神の啓示史を中心とした書であるが、神が靈光を闇の世に投じて、これを靈光の世界に救済せんとする深刻な悲劇の相を有ったドラマであるので、私の神学の性格も靈的な劇的なものとならざるを得ない。靈的劇的神学 (geistige dramatische Theologie) などという言葉はないが、そんな気魄のものである。内実の焦点からは、十字架・聖霊の神学である。

先生の神学はこれに尽きます。「十字架・聖霊の神学」というのは、今日やります。「天路」とか、次の「終末的実存」とか、更には「無教会神学論」といった、先生の聖霊体験以前には出てこない。聖霊体験をなさってから、この「十字架・聖霊」という、「聖霊」ということが非常に力強く強調されることになります。それなんかも段々と分っていただけだと思いますけれども。

聖書の著者は神であり、主人公はキリストである。旧約に於てキリストはロゴスとして隠れた実存主であり、新約に於てキリストはサルクスと成ったイエス、顕わな実存主である。この宇宙的歴史的靈的人格たるキリストはまことに言語に絶する無者である。この「無の神学原論」は、この驚くべき靈的劇的実存キリストを主体とし、預言者と使徒の両翼をもつ靈鳥が創造から終末にかけて神の歴史の天空を飛翔するにも似ていよう。

キリストは神のドラマの主なるぞ

キリストは宇宙を抱くみ霊かな

こういうふうにして、前半第一部を総括しておられます。ここで「実存」という言葉が度々出てます。「顕わな実存主」とか、そういう「実存主」。「旧約に於てキリストはロゴスとして隠れた実存主である」とか。そういう「実存」という言葉がすくく出てくる。

「実存」という言葉は、非常に今の人たちには耳慣れないかも知れませんが。戦後すぐに「実存哲学」というのが流行ります。先生はもう戦前からこういう「実存」という言葉をどうも使っておられたようです。

● 神の実存体たるイエス

先生がこの書物の中で使っておられる所を示しますと、285頁、これは次回にやります第三章の中に出てくる。そこをちょっと見てください。「神の実存体たるイエス」という所です。

《神の実存体たるイエス》

神こそは実実存の実存である。

「存在」と言いますと何か浮つくんですね、軽いです。存在というと、ただ自然的にそこに在るといっただけで、「実存」というと人格的な響きが出てくる。生きざまとか、有りよう



とか、目的とか、何のためにあるのかと、そういった目的な観念が入ってきます。そして、道徳的意志的な側面が出てきます。単なる存在ではなくて、実存というのはそういう響きがあると私は理解している。

神さまこそはその実存中の実存であると。神はモーセに

「あなたのお名前は何ですか？」

と訊ねられた時に、

「私は有りて在るものなり」

と、そういう答えが出てきた。その「有りて在るもの」というのを先生は、

「在るといふ存在が他者を在らしめる、万物を在らしめる、生かしめる。在ることが即ち他を命づける、そういう存在、在り方だ」

というように捉えられました。そして、その神さまはただ天上高く鎮座します神ではなく、自らを外へ投げ出して、投じだして、下ってくる神だと。実存というのは、ここにすぐに出てきますように、

「我は有りて在る者」(出エジプト3・14)との驚くべき啓示の言がそれを示している。

神自らの存在が、それ自ら外に立ち出でて(ex-sistere)、『

「自らの外に」というのは「ex」——「出口」「exit」とありますね——その外へ出て行く。「sistere」というのはラテン語の「存在する」とか「立つ」とかいう意味です。だから、自分の在り方がその自分の存在の「外へ出て行く」。しかも、「下へ」「subieto」と、自分を下へ投げ出すということになる。「主体」である方が下へ投げ出していく。何のためにか。人を救うためにか、そういうようなことになる。

それ自ら外に立ち出でて、自己の姿をそこに現じ給ったのが、肉となりし具体的なキ

リスト・イエスである。

神さまは見えないお方です。見えないお方、そして天の座に坐していらつやるお方が、その神と共にいました霊なるキリストをして、地上へくだらしめる。キリストという姿においてご自身を外に顕される。神さまという霊なる存在と、キリストという霊なる存在は、人格的には別なんですけれども、二者にして一者のような関係なんです。そしてキリストというお方が肉となって、霊なるキリストがイエスという受肉体となって顕れてきた。これがヨハネ伝ですね。その受肉体となって顕れたイエスは絶えず天に向かって祈っておられる。「父よー」と祈っておられる。媒介しているのは聖霊なんです。そういう構造になっています。そこで、

神の実存の自己開示が、メシヤたるイエスである。キリストは実に神の実存体である。

今生きて在まし給う霊なるキリストは復活のキリストと全く同一性的である。かの時の現実には正に我らにとっても現実なのである。》

ここには「聖霊」という言葉は出てきませんね。復活のキリスト、あのお姿と、それから



天界に在られたキリストのお姿、霊なるキリスト。これが同一性があると、そういうふう
に言っておられますが。

聖霊のバプテスマを受けられてからはもう直ちに「聖霊」が表に出てきます。この時代
においては、「十字架・復活」、あるいは「十字架・復活・再臨」という三つに——十字架
は過去の贖い、それが復活という新しい生命の現れ、そしてそれが再臨という次元におい
て全く新しく完成されるという——「十字架・復活・再臨」というふうに捉えておられる。
ところが、のちの先生は、十字架の延長にあるのが復活であって、これはむしろ十字架が
本当であって、これで全ては終わったよ、贖いは終わったよ、ということを実証するための復
活だ、だめ押しだ。新しい生命は聖霊だと。十字架を通過して復活という姿で十字架は実証
された。つまり、罪の贖いは実証された。そこに間髪を入れず流れてくる新しい生命、新
しい霊、これが聖霊です。十字架と聖霊とは切っても切れない。十字架の後に時間をおい
て祈っていたら聖霊がくだるのではなくて、これはもう同時的瞬間的に起こる表と裏の関
係だというふうには、そこに純化されます。そうしますと、復活というのは十字架の中に吸
取されてしまっている。それで「十字架と聖霊」という、それが我々の現実の姿です。そ
れが新天新地でももちろん完成はされますけれども、そんなふうには先生は変っていかれる。

でも、この「天路」だとか、次の「終末的実存」とか、そういう論文においては必ず、十字架・
復活そして再臨とか、こういうふうな現象的な次元で見えておられるように私には思われま
す。それが本当に内面化されていきますと、霊化されていきますと、十字架が本ものなら
ば必ずそこに聖霊はもう来ています。聖霊が私たちの新しい生命である。十字架は私たち
の旧き我々の死である。旧きは葬られて、聖霊の生命が来ている。そのことを弟子たちにハッ
キリ、世に宣言するために、復活という姿で顕れてくださったんだと。

「聖書の記事に復活なんていうことが一つもなくても、私はキリスト・イエスとい
う方は復活せざるを得ない。サルクス、肉なるイエスさまが霊なる姿で現れてき
たのは——霊体で現れてきたのが復活でしょ——当然のことだ」

と。それが現れてこられたのは、私たちに新しい霊の生命を与えるためである。これは聖
霊という生命である。もちろん、私たちもあの復活された霊なる、霊体なるイエス・キリ
ストの御姿に化せられていくんですけれども。

まあそういうふうに変っていくんですが。今の285頁は「神の実存体たるイエス」とい
う所に説明がありますので、ちょっと開いていただいたわけです。

●第二章 天路 「はじめに」

次に第二部の所では229頁に入っていただきます。

《第二章 天路

はじめに



本章の「天路」の原型は、一九三七年十月一日、信仰の恩師藤井武先生の第七周年記念講演会（日比谷公会堂で、故伊藤祐之氏の司会により、今は亡き矢内原忠雄、金沢常雄両先生と講壇を共にした）で「別の路」と題して語ったものである。

そもそも「天路」というこの論文は、かつて「別の路」という題で公開講演会でお語りになった。藤井先生の7周年記念1937年に、ご命日であります10月1日に矢内原忠雄、金沢常雄両先生と一緒に日比谷公会堂で語られた。1937年、先生は33歳です。33歳にしてこれだけの思索を重ねられた。しかも、時代からいいますと、戦前ちょうど日中戦争に突入する直前位ですね、昭和12年ですから。そういう時代にこれを語っておられるということ。そして、内容ですが——この「はじめに」という文章は後に書かれている文章ですが——

福音は靈的な有機体的なものである。特にヨハネやパウロは靈的神学的な要素を深く備えている。福音を深く考察し、追求する靈的神学的な思索と告白とは、信仰の健全なる展開のため、あつて然るべきものと考えている。そういう意味に於て、靈的神学的信仰告白は、私の信仰歷程を、靈的神学的に語るものであるから、この「天路」を第二章として順次歴史的に信仰告白を掲げることにした。

ですから、この「天路」を出発点として順次、自分がどのようにして信仰の路において、そういった神学的思索を深めてきたか、それが時間的順序で並べられているわけです。

私が一般に行われている「神学的」という語の上に、特に「靈的」という語を冠したわけは、従来の神学が概して聖霊という重大な要素を希薄にしているので、キリストの福音の本質に即せんとする神学の性格を明かにせんためである。》

だから、この「靈的」という語を冠されたのは、むしろ聖霊体験以後の先生の特徴です。それから本論に入りますが、本論に關しましてはごく簡略に要点を見ていきたいと思います。今日は第二回目ということで復習の面もありますので、始めの方はごく簡略にいたします。232頁から始めます。2行目の、

《路にはだかる三獣

……我々はこの大バビロンに生きて、文明の利器の恩沢を蒙っている文明人である。

これと同じような書き出しが次の「終末的実存」、これと1948年ですから11年経ってからの、しかも戦後です。昭和23年に語られています。ところが、書き出しはほとんど同じなんです。だから、先生は日中戦争が始まるような前夜であっても、あまりそういう問題に深入りしないで、むしろ精神状況を見ておられる。精神状況といいますが、非常に似ているわけです。「文化文明を謳歌している」という、その点は大正時代を引き継いでいるような時代です。大東亜戦争に突入しますと、そうは行かなくなってきました。けれども、まだ昭和12年頃は、まだそこまで深刻ではなかったのだらうと思います。ですから、その社会観というのがここに出てきますが、

我々はこの大バビロンに生きて、



「バビロン」というと、神に逆らう、文化文明を謳歌して神さまを否定するという世ですから、文明の利器の恩沢を蒙^{こうむ}っている文明人である。また凡ゆる文化的機関によって精神的活動を促されている文化人である。

「文明、文化」といいますが、この「文明」というときにはやや物質的な面を考えています。戦後でしたら、「三種の神器」というので、電気洗濯機と電気冷蔵庫とテレビですか、それが文明の象徴みたいなものだった。今だったらパソコンでしょうか、何か知りませんが、文明というのは非常に物質的な面の人間の生活を豊かにするようになるもの。文化というのは精神的な働きです。その両方を合わせて「文化文明」といつているわけです。ですから、「文明の利器の恩沢」は今もそうなんです。蒙^もっております。それから、いろんな精神活動も、文化的な諸機関によって促されている文化人であるという。

生活、社会、国家、国際等の諸問題が錯雑^{めづ}して我々をとり繞^{めぐ}っている。このような外的事象^{じしやう}が有^もつさまさまの諸勢力^{しよせきりき}があまりに強いために、

ついそちらの方にばかり目が向いて、魂の問題、内面に光を当てる、メスを入れるということをしないうできた。

現代人の魂は、一面高揚的氣勢を示すにも拘らず敗滅への路を辿っていると思われる。

ここにおいてか我々は、魂の生き方の問題を真剣に問わなければならない。それは時代と民族とを越えた根本的、普遍的、礎定的問題である。個人の魂の生き方の問題はすべての精神活動の根底的問題である。……個人の魂の問題はいかなる時にも顧みらるべき重大性を有つ。外的解決が当座いかに成功し、いかに精神的に見えても、もろ個人の魂の問題が真に徹底的に解決されていないならば、いつかは必ず崩れるときがくるであろう。これに反して、外的にはいかに失敗や危険や矛盾があろうとも、真剣に堅実に魂の課題を解決して行くなれば、必ずや最後の勝利があると信じてよい。

これが宗教的な側面と、文化の側面。文化は外に向かつて華やかさを求めていきます。宗教の面は、本当の宗教は内面化されていきます。心の世界、魂の世界ですから。深く深く沈潜していきます。方向は反対なんです。けれども、外の華やかさは、もし本当の見えない世界によって支えられなければ、やがて崩れ去る。そういうことをちゃんと先生はここで言っておられるわけです。

●三つの岐路

では、そういう個人の魂の問題はどうやって解決されるのか、どのように問いかけていくのか、ということから始まりまして、「人間の求めるものは三つある」ということを言われる。途中を飛ばしまして、238頁に飛んでいただきます。

《三つの岐路》

一体、人間が路を歩むということに如何なる意味があり得るか。その一は己れの欲



するところのものを^{めあて}目当てまたは相手として歩くことであろう。その二は神（広義の）を第三者として、

これは広い意味での神です、「イデア」という程度の神でもいい。

すなわち達せらるべき理想の対象として求めつつ歩むことであろう。その三は神（厳密な意味の）を第二人称すなわち対話者たる相手として歩むことである。

これは厳密の意味の神、絶対者という神。これを汝と呼び、その方から汝と呼びかけられるという二人称的に一対一の関係で、いわば神さまと取っ組み合いをするという生き方。

人生のすべての道はこの三つの中いづれかに属すると一応は考えられる。第一の路すなわち己れの欲するところのものを目当てまたは、相手として歩く生き方はおよそ物質主義、実利主義、幸福主義、享楽主義、果ては虚無主義というような大方の現実主義的立場であって、実は最も多くの人々の心をとりにしているものである。

なんと現代を言い当てておりますでしょうか。この物質主義、実利主義、幸福主義、享楽主義、果ては虚無主義。神を見失っていた戦後社会、日本の社会。一時は高度生長で、非常に何か将来が輝いて見えた。それが石油ショックだとか、いろんなことがあって、一時ちよつと下火になったけれども、またバブルの時にウワーツと広がる。魂の問題というよなことは本当に問題外にされてしまう。

ところが、現実には非常に、青少年の問題一つをとりましても、世の中の犯罪をとりましても、非常に凶悪化してきたり、正に魂の空白、虚無がああいう形で跳ね返ってきているというふうに思われるような情況が現代そのものなんです。

だから、現代という時代は決して突然表れたのではなくて、戦後、戦争でいっぺん全部失ったにも拘らず、そこから立ちあがるときに、こういう物質的なもの、実利的なもの、経済的繁栄——人間は食べ物がなくてはならないとも言って——そこから始まった。一生懸命に働いた。それはよかつたんですけれども、心の問題、魂の問題、道徳の問題、それを全部切り捨てて、見える世界の範囲を求めた。その結果が現代だと、そういうふうに私には思えます。そうしますと、ここにある第一の生き方を大方はやってきたのではないかと。それが第一の路ですね。

それから第二の路は何だろう。次の239頁の4行目、

《さて次に第二の路、すなわち神（広義の）を第三者とし、達せらるべき理想の対象として求めつつ歩む生き方は、広義的理想主義的または浪漫主義的な立場である。

そこでは神は究極のところ理念または憧憬の対象として把握されているわけである。

一般道徳修養の路もこの路のうちにあると云えるけれども、それはまたしばしば第一の路に通じている。

実に辛辣ですね。人間は努力修養して神の如くならうとする。神を不老不死というふうに捉まえる人があるかも知れません。愛の権化というふうに捉まえる人があるかも知れま



せん。神は無私のお方で素晴らしいお方です。修養を積んで、思索を積んで、神の如くなるとうとう、ギリシヤだったら哲学的な面で、インドだったら修養を積んで自分をいじめて、ユダヤだったら律法を守って、とにかく神の如くなる。そうすれば必ず行けますという。それは自己の延長上に答えを求めようとするからなのであって、いつペン自己が否定されなくてはならないというのが第三の路で出てくるんですが、とりあえずはこの第二の路はかなり高尚なんですから、結局はそれは自己追求だと。精神的な面で高尚に見えるけれども、結局は自己を完成させよう、自分が立派になろう、自己満足につながるのではないかという、非常に辛辣な見方がなされます。それが239頁の一番最後の行にあります。

以上の如く第一、第二の路を考へるとき、後者は前者に比して著しく高尚にして道徳的なるにもかかわらず、要するに、自己追求であり、自己肯定であり、自己完成の方向を辿る路である。それがいかに没我的に見えてもなお且つ主我的な路なのである。但しこの二巨人にはそれを乗り越えた領域もあったが。

「この二巨人」というのはゲーテとカントを指しているけれども、それは別として、この路というのは結局はやっぱり自分というものをそのまま肯定した上で、その上に完成を目指しているということ、必ず行き詰まるということを言われるわけです。更に続いて読みますと、

人間の感性も智性も実践理性も、自己発展、自己充実の方向をとるときは、結局真の人格主義に立つことは出来ないのである。人間の全我が根本的に失われているものであるとの自覚は、これらの途上においては、自己肯定から出発するこの途上においては、

実は発見されないのである。故に道徳的努力と云うものは、それ自身においては、理性的なものまたは神性への、謂わば「知らざる神」への暗中模索たるに止まり、その努力が肯定される限り、救を自然的連続の方向に要望するものであり、プラトンのイデアへの求めとなるかアリストテレス的樂觀主義に甘んずるかまたは現世的諦念主義に墮するかである。

故にこれらの路においては、それが感情的であろうと、実践理性的であろうと、すべてはパウロの所謂「肉」(サルクス)であって、

パウロは「霊と肉」と言いますね。「霊」というのは結局、自己否定から始まって神中心に生きる。いつペン自己が否定される。「肉」というのは自己肯定なんです。人間の自然的在り方そのままを認めて、その延長上に何かを求めていくという、これは「肉」とパウロは言っ、これを激しく否定した。サルクスであって、

性来の人間における最も精神的なる要求も、ついにこの「肉」なる極印を捺おされているのである。

というふうなことになります。



● 第三の路

そして、次に「第三の路」というのが242頁にあります。

《第三の路》

然らば第三の路、すなわち神を相手として歩む生き方とはどういうものか。そこには如何なる問題と解決と更に課題が存するのであるか。

極めて論理的ですね、先ず如何なる問題があるか、如何なる解決があるか、それから如何なる課題がそこから生じてくるかという。そこから、神認識ということについて、この出だしの所、それから後の方にもよく出てくる、先生の根本的立場というのは、人間が人間を自己肯定して、それから神さまを捉まえようとする路は結局、さっきの第二の路と同じようなことになってしまうという。たとえば、「信仰」という言葉すらが、

「私は信仰を持っている。私は神を信じている」

と、「私は」という「私」が立っていますね。

「私は信仰が固い。私は信じた、ゆえに救われた」

とか。その「信じた」というのは一体いかなるものか、ということの問題になさる。そうじゃなくて、「信ずる」とは「信ぜしめられる」こと、神さまの圧倒的な迫りに自分はぶつぶざされて、「参りました!」という所から始まる。

「神さまに捕まえられた、神さまにねじ伏せられた。だから私はもう自分を立てません。全く無条件降伏しました。私は信ずる心すらありません」

と、そこから出発するものが本当の信であるということ。つまり、神主体、神の絶対性。それでなければ、いかに「信仰によって義とされる」ということが、自分が肯定した自己肯定の、

「私の信仰は強いのです」

とか、

「私は信じました。あなたは信じてません。だからダメです。私は信じてます」

とか、その「私が、私が」と立っているものは結局、さっきの「第二の路」と通じるものがある。それはやっぱり肉ではないか。自分から発した信仰なんて大したものではないと。自分が徹底的に否定されなければならぬ。その否定は、普通のサルクスである我々人間はできない。肉なる我々はできない。

「ああ、われ悩める人なるかな」

と、この自覚が生まれた時に、キリストは

「ほらごらん。十字架で、否定できないお前がそこでもう片づけられているよ」

と。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と。本当の死というものは神さまの前に一端、己に死ぬということとは自分ではできない。



「十字架の死においてお前は死んでいる。死をも賜っているんだ」と。それを受けた時に初めて身が軽くなる。本当にフワフワフワッと浮いていくような、そういう軽やかさというものを初めていただく。それまでは緊張関係です。

「信じよう、信じよう!」

と、今晚一生懸命に祈っても、あくる朝、目がさめたら、

「あれ? 昨夜のあれは何だったのか?」

なんてね。特別集会から巷に帰ってきたら、

「あれ? あれは何だったのか、幻だったの?」

と。これは全部、自分から発して、自分が

「一生懸命に信じよう信じよう。信じねばならない」

とやっていまして、それは結局、自分から出たものはダメなんです。それを全部否定されて、

「私は信ずることすらできません。神さま、キリストさま、あなたが善きようになさってください!」

と言って、全部投げ出した時に、主さまの方から

「何も信じなくなっちゃいいよ。私が現にお前の中に居るではないか。私がお前を捕まえているではないか。お前が私をつかまえるのではない。私がお前をつかまえた。

だから、心配いらん」

と言われる。それが、

「汝ら、われを選びしにあらず。われ汝らを選び。而して汝らを立てたり」

と。立てるにはそれぞれに力を与え、霊を与え、そして立たしめてくださる。全部、人間は受け身なんです。

お天道さんは、誰も捕まえられないですよ。お天道さんから流れてくる光を、外へでて光を浴びる。雨が降ってきたら雨を浴びる。それが我々のできることですね。心を開く。キリストさまの恵みもそうなんだ。

「私は受けいれる値打ちすらないものです。罪深い人間です」

「しかし、お前の罪は私が引き受けたんだよ。お前は何も心配いらぬ。お前が自分の努力で、自分の修養で、自分の悟りで、神の如く、天の父の全き如く全くなれるなら、私は何のために地上におりてきて十字架を負わねばならなかったのか。私が死んだのは無駄だったのかね」

「いえ、無駄ではありません。本当に主さま、あなたが三年間あれだけ伝道なさっても、人は表面的には喜んだけれども根っこからは変えられませんでした。だからとうとう最後の手段として、神さまはあなたを十字架にお付けになった。ゲッセマネの苦しみを与えられた。ゲッセマネであなたは苦しんで祈ってください」



と。キリストは、

「どうしてもこれをお受けしなければならぬですか。あなたからどうして捨てられなければならないんですか。あなたと私のこの愛の一如、愛し愛されたこの関係がどうして今、引き裂かれなければならないのですか。あなたは全智全能の神さまではありませんか」

と言つて、苦しんで祈られたのがゲッセマネの祈りなんです。何も己の命が惜しいとか、そんなレベルではないんです。本当に神さまとイエスさまは一つ、一如。御意が直ちに成ること、キリストは御意しか求めておられない。己のために何も求めていない。そういうお方があのように苦しんで祈られたというその祈り。こういうものは本当にキリストと同じ次元に立つて同じ苦しみを味わなければわからない。かすかにこうだったかな、ということは人間として言えましても、でも、私はその場面を思いますと、涙が出てくる。涙なくしてあのゲッセマネの祈りの箇所を私は話せない、本当に。でも、そのようにして、

「十字架を受けます!」

と言つて、決然と立ち上がつて、ゴルゴタの路を歩んで、十字架にお付きになつて、

「父よ、彼らを赦してやってください。彼らは自分のしていることがわからない
いんですから、どうぞ、彼らを審かないでください」

といつて祈つてくださった。そして、そばにいたもう一人の盗賊に対しては、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

と仰つた。そして、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫んで、

「わが霊を御手にゆだね」

と。そういう主さまのあの尊い十字架の贖い、これをお受けするしか私たちは行く所はない。そこに行けば、キリストはニコニコと微笑んでくださったっているんです。

「もうあの十字架は過ぎ去つたよ、痛んでも苦しんでもいいよ。あれは過ぎ去つた。今は光輝いて生命そのものに溢れているから、お前にそれを上げたい。あの十字架は今も霊界で立っているよ。そこへ来たら、どんな罪だつて何だつて、本当にそこに平伏して、それを涙して受けとる者には、もう過去の問題なんかみん
なすつ飛んでいるんだ。大丈夫だ」

と。

「汝と我とは一つなり」

と、そこで仰つた。パウロは人間の側から、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と言いました。キリストの側からは、



「お前を背負って、私は一緒に十字架についた」

と。自分のために十字架は必要なかったんです、キリストは。あのまますぐ天界へ飛んで行けるお方だった。ところが、あえて我々を救わんために、十字架で私たちと一緒に生きてくださった。あの十字架で過去の人たち、その当時の人たち、これからの人たち、すべての人の「我」^がという、罪という、根源的なものを全部背負ってくださいました。物凄いことです。天上天下、あの十字架は霊の根源現実です。木の十字架は朽ち果てても、霊界に立っているこの輝く十字架は消えない。この前には何者も口を閉ざす。それを受ける者はサツと天界へ導かれる。それに逆らう者はしようがない。唯一の救いの道を拒んだら、それは自分で自分を闇の中へ突き落としているんですから。闇の中に付き落として、

「やつぱり、私は悪うございました」

と言って誤れば、また帰ってこれますよね。そういうもんですから、神さまの世界というのは。ですから、あの片一方の盗賊が、

「私は散々悪いことをしてきました。本当にマイナスもマイナスも、地獄が当たり前です」

と。現に括り付けられているんですから、^{はりつけ}磔の刑で。けれども、

「あなたさまは違います。あなたさまは何一つ罪を犯されなかった。いや、人を愛して愛して、神さまのために働いて、善きことばかりをなさってくださいましたのに、十字架におかかりになっている。本当に申し訳ない。でも、あなたは必ず御国にお入りになる。その時は、横にこんな哀れな奴がいたということ、どうぞ覚えてください!」

「今日、汝、われと共にパラダイスなり!」

と。それがキリストの大愛なんです。本当に無条件の愛です。こんな愛に平然と立っていられますか。

けれども、私は申します。それではなぜ、人々は——教会にはみな十字架が立っています、ことごとくに十字架が語られますけれども——なぜ、十字架の前に人間の心は頭を垂れることができないんでしょうか。なぜ、平伏することができないのでしょうか。そういうふうには問われるでしょう。ところが、私は、

「十字架を本当に示してくださいるのは実は聖霊なんだ。人間の肉はその十字架すらも受けとれない。そのくらいに人間というのは根源的に失われているんだ」

と、そう申したいんです。聖霊さまの執り成しによってのみ、人間は追いつめられて、遂に「参りました!」と言う時がきたときに、その十字架がサーツと光って自分の中に入ってくる。それには時間もかかりません。

だから、人間の中からは救いは出てこない。でも、神さまは愛の神さまですから、いろんな方法で一人ひとりの魂を最善の方法で救い上げようとして働いていらっしゃる。天界



に既に召されて行った人たちがみんな天使となつて働いているんです。小池先生もそうです。いろんな方々を導こうとしている。それは、響き合う霊がありますからね、相性がありませんから。いろんな人たちが天界に行つて、「あ、あんたはこつちの人」とか。時には事故に出あつてみたり、いろんな大変なことにあつてみたりする。その時に、

「あつチャンスだよ、委ねるんだよ、チャンスだよ」

と促す。そしてその本当の十字架を受ける。受けいれたら、あとは一切のものが相働いて、失つたものが全部プラスになつてくる。そういう神さまのご計画なんです。

私はまるで天界に行つて見てきたようなことを言うでしょ（笑）。すみませんね、そうとしか思えないんですよ。すべてのことが相働きてプラスとなる。失われたものがすべて回復される。

ヨブだつてそうだと思う。ヨブはもう全てを失つたでしょ。しかも、ヨブはなぜ苦しんだかという、神さまとサタンがやっているんですよ。サタンが神さまをけしかけて、

「ヨブはあなたにああやって従っているけれども、それはあなたが余りにもヨブを可愛がつて、いいことばかりしてあげているから、ヨブは従っているんですよ。辛いことが出てきたら、きつとあなたを呪いますよ」

と言つて、神さまに喧嘩をうつた。神さまはそれに乗つかつて、

「ヨブはそんなことはない。あいつは絶対に私を裏切らない」

「それでは、いじめていいですか」

「いじめてもいいよ」

と。ヨブはそういう神さまとサタンの喧嘩の相手させられた。知らないですよ、それも。舞台裏を知らないで、いろんな災いが臨んでくる。奥さんはとうとう見切りをつけて、

「さつさと、神さまを呪つて死になさい」

なんて言つて、どこかへ行つてしまった。でも、ヨブは堪えて堪えて堪え忍んだ。ある時とうとう、ヨブは絶望的な状態に陥つて、

「もう、ダメ。もう、神さまも何も無い」

という時に、スツと示されたんですね。

「お前は何者だ。お前は神なのか。大きな口をたたいて、お前は神なのか」

という御声が聞こえた。

「いや、そうではありません」

と言つて、ヨブは本当に平伏した時に、神は

「それでいいんだ」

と。それからヨブはグングン、祝福を与えられ、体は良くなり、家族も与えられ、死んでいた子供が甦るといふ、それがヨブの物語ですよ。あれは文学的な表現ですけれども、あれは一人の人間が神さまを——ヨブも自分の主観ですよ、自分の信仰ですよ。聖書の書



き出しでは、

「ヨブは義しい人であった。神が祝福される」

と書いてある。そのヨブが必死になって自分の信仰で——神さまをどこまでも立てようとしていたけれども、とうとう力が尽き果てて、そして屈伏して、

「私が悪うございました。いろいろ理屈を言って申し訳ありません」と言う。友だちも悪いんですよ。

「神は義しい人間を祝福する。災いが臨むのは絶対お前が間違っているからだ」と言うものだから。親友がきて慰めるどころか、審いているんです。

「お前ががこんな目にあっているのは、きつとお前が悪いことをしたからだ。

神さまは助けない」

と。ヨブは、

「私は何の覚えもない」

と、自分の潔白を主張するという、そういう物語でしょ。その自分の潔白はよかつたんだけれども、お前自身が、自分の信仰でも義しさでもない。神さまの恵み、愛、それだけで自分は存在しているという、そこにたどり着くのにそれだけの禍わざわいがあつた。そのことに気づいて降参したときに、神は直ちに何十倍もの祝福をもってヨブを回復されたという、そういうお話なんです。

だから、この「三つの路」ということに、そういうところで本当に人間がこの第三の路で神さまを相手にするというときに、それは結局は神さまの方に圧倒される。神は全権を持っていらつしやる。ルターはそれを「神の独占活動」と言った。

「神は祝福せんとする者を祝福し、呪わんとする者を呪い給う」

という言葉が、エソウとヤコブの所で出てきますものね。

「神はヤコブを愛し、エソウを憎んだ」

なんていうことまで旧約聖書に出てくる。あんな躰くまの言葉があるんですよ。それをパウロがちゃんとローマ書で引いている。そういう無茶苦茶な神さまなんです。

その無茶苦茶な神さまでも、文句を言わないという全くの無条件降伏をせしめるもの、それは何か。それは私にとっては理屈ではない。キリストの十字架の愛である。この十字架のキリストに私がさつき涙ながらに語っているのは、そういうところで主さまを受けられたら、もうこのキリストを下さつた神さまは、「我々に理解できる、できない」という、そんな問題ではない。このキリストをこのように下さつた神さまは愛の神さまでなくて何であろうか。我々の小つぽけな頭でわからないだけだ。小つぽけな頭でわかるような神さまは大したことない。

このキリストを下さつたという、十字架において神の愛は極まった。神の義は貫かれ、そして神の愛は十字架に結晶した。それ以外にないんです。それがローマ書3章、4章、5



章です。だから、いろいろ理屈をこねている間はまだまだ子供なんです。

「そんな理屈はもういいよ」

と、神さまは仰いますよ。だから、結局はもう無条件降伏です。

禅の世界もそうでしょう。宮本武蔵もそうでしょう。「強くなりたい」と力んでいる武蔵と、それを乗り越えてもう本当に体から全部、力がぬけて、風のごとく柳のごとくになった武蔵。何か飛んできたなら、パツとその時に身をかわす。しかし、いまだボケーンとした顔している武蔵。「武蔵には殺気を感じる」と坊さんは言います。武蔵がその前を通りかかるだけで、坊さんが殺気を感じる。そういういきり立っている武蔵の姿と、それからそれを乗り越えた本当に飄々たる武蔵。お坊さんだって皆そうですよね。修行して苦しんで苦しんで、そこを乗り越えた坊さんはもう、

「いいよ、いいよ、何でもいいよ」

という、バカみたいになっっている。それが本当の境地に達しておられる。

ですから、私たちはどの道の方であろうと——宗教だけではありません——剣の道においても、あるいは柔の道やわらにおいても、あるいは野球であっても、何でもその道に命を懸けて、何か己を超えたものに連なりたいという悲願、願いをもってやっている人を決して無視してはいけません。それは尊いことなんです。尊いことをやっている。決して

「クリスチャンだけが義人である」

なんて、そんな思いついたことだったらダメなんです。それぞれの方が命懸けで何かを求めている。その時に何かのきつかけで、ふつとキリストの道に繋がるかもしれない。それは神さまの側でなさることであって、我々が「ああだよ、こうだよ」なんて、そんな大それたことはできないと私は思っている。真剣に道を求めていく人は、どの分野であろうとちゃんと神さまは見てくださっている。相応ふさわしい道を行くようにしてくださっている。たとえこの地上ではそれが見つからなくとも、次の世界へ行つて必ず導かれている。宇宙をいだけキリストさまは、それだけのつかさをもって人間を愛してくださっている。

傲慢な奴はダメなんです。傲慢な奴は、その傲慢をたたき潰つぶされなければいけない。本当の道を極めていく人はみな謙虚ですよ。決して己を何者かと思わない。謙虚に謙虚に行かれます。クリスチャンの陥りやすい誤りはまず、

「己の生きている世界が絶対だ。あなた方はみなダメだ、罪びとだ」

と言って、己と他者をパツと区別する。自分を義人とし、お前たちは罪びとだと。なぜですか。

「信仰がないから、信じないから」

と、こう言うんですね。

「私には信仰がありますから」

とかね。これが一番いけない。



「お前の信仰なんて何だ。自分で自覚している信仰なんて何だ。神さまだけだよ。自分たちは子供にすぎない」

ということ。ニュートンも言ったそうですね、

「私は、海辺で遊んでいる子供が貝殻を拾って戯^{たわむ}れている、そのようなものだ」
と。だから、本当に学者であれ、科学者であれ、どなたにしても人として、魂を持った存在として、本当の方とどこかで繋がって、その境地に入ればみんな子供の心になる。童心なんです。

私は赤ちゃんが一番神さまに近いと思っています。赤ちゃんというのは全く無力でしょ。お母さんに絶対依存でしょ。お母さんの乳房に——あれは本能的に乳房で乳を吸うのを覚えるんですね——乳を吸って、お母さんにしがみついて、そしてお母さんはしっかり支えている。そして、赤ちゃんがお母さんに抱かれて、スヤスヤ安らかに眠っている。これが本当の神の子の姿なんです。

キリストの姿は正に父の懐でそうやって眠っていた。だから、湖の上で暴風がきたって安らかに眠っている。弟子たちが慌^{あわ}てっていると、

「何を慌^{あわ}てているのか。神さまの懐の中にいるではないか」

と。そういう姿。だから、キリストは神の赤子です。幼児^{おんご}。私たちはキリストの幼児、キリストの赤子でありたい。そういう世界ですのですね。

「第三の路」のところに戻りましょう。243頁のちょうど真中の所。

《……主體的なる神認識とは、神在^いますが故に我が在ると云う立場であり、神の啓示が神自ら人格的実在を示すが故に始めて我の自覚が在ると云う絶対的自覚の立場である。我れが神を知るのではなく、「我は神に知られたり」と云うパウロ的な自覚である。根拠が全く対者なる神にある。我れが任意に信ずるのではなく、信の源は神の霊的人格的実在にある。これほど現実な事実は何処にもない。これ実に人間の在るべき唯一の立場であり真の現実である。

なんと33歳の、まだ聖霊体験をなっていない先生がこれだけのことを力強く宣言するといふのは、これはただものではないです。この宣言をどれだけ他の方々が受け入れられたのか、それは私は知りません。けれども、この宣言は凄^{すご}いと思いますよ。

社会倫理の根底もこの立場に置かれていなければならぬ。世界のすべての文化的問題の根源は実にこの神対個人の場に存する！

つまり、集団主義とか、団体主義とか、全体主義とか、そんなものではないと。一方ではファシズム的な全体主義がある。戦後は社会主義という全体主義がある。

「社会が良くなれば人間は良くなる。個人は社会の細胞だ」

と言って、個人なんていうのは組み込まれた一つの細胞にすぎない。

「社会主義というものが完成すれば、そのときに初めて個人の救いは成り立つ」



とか、そんなふうには言ったんですよ。現実には、どんなに酷いことだったかということも歴史が証明しています。それに対しても先生は、「ここが大事だ」ということを叫び続けている。次の「終末的実存者」という所です。その点では先生は一貫しています。

カントの人格主義は著しく理念的であるが、信仰による人格の概念は期くの如く実存的である。それが如何に深い倫理であるかは、神の靈的人格的実在の弁証法的機構の分析により明かとなるであろう。》

このへんの「弁証法的機構」なんていうのは、ベルジャエフの『神と人間の実存的弁証法』という本を——あれは独訳を通してでしょうけれども——先生は白水社から翻訳して出しておられる。それを読めば、少しはわかるのではないだろうかと思っておりますが、私はまだ読めておりませんが、こんなことを言っておられる。

● 罪びとの首

それから、人間の自覚として、次の244頁です。「罪びとの首^{かしら}」という所で、

《罪びとの首

さてあらゆる限定を絶する人格の神と、いとも小さき我との関係において当然起るべき問題がある。それは如何にして我は神を相手とし得るかの問題である。そして何故にかかる問題が起るか、換言せば何故に「汝」と「我」との間には自然的関係が成立し能わぬか、と問われねばならない。

さつき赤ちゃんとお母さんという関係が、この我々と神さまの場合に、なぜ自然的にナチュラルに生じ得ないのか。それを追究していると結局、我々は自我的存在であり、自己主張する存在であり、利己的な存在であり、神さまを求めるといつてもそれは自分の手段として、自分が幸福になるための手段として、神さまを自分の手下にしようという魂胆でもって、神を求めてしまう。それはどこまで行っても罪深いという、その根源的な罪性。「自分がどういふ罪を犯した」なんていうのではなくて、「自分の心がどんな罪を犯している」というのではもくて、

「自分の存在そのものが実に罪である」という、そこまでこないといけないということが次に出てまいります。

……まず生ける神、人格の神をあえて相手とせよ！ しかせば我はわが本体の如何なるものたるかを知るであろう。それはすなわち、私のうちに罪があると云うよりはむしろ、私は罪である^{と云う}全体的体験であり、超主観の自覚である。

これも凄いですね。こういうふうにして、この頁の終りの方に、

……相手とするべく追いつめられたる人の立場と云うものは、道德の新しい認識と、自己の新しい発見と、罪とは何ぞやの解答と、信仰とは何ぞやの確認を余儀なくされるほかないはずである。



ギリギリの所まで行つて、そこで引つくり返されて、それから新しいものが始まるという、ほぼそういうことだと思ふんです。

然るに人は実に「自我」であり「罪」であるが故に、神を無視せんとし、自己を欺瞞せんとする。人生の岐路これより大なるはない。》

私が接した先生は常に、

「罪とは何か。自我、これが罪だ」

と、よく仰いました。しかし、そういう自分自身が、存在そのものが罪であるということ、既に33歳の時にこういう自覚を持つておられたというのは凄いことだと思います。キリスト教の牧師さんとかいうのはみな、

「人間が悪い思いを懷いた。神さまに対して不信仰であつた。人に対してこんな言葉が発した。手足がこんな罪を犯さしめた」

と、こういう人の外に出た行為、あるいは心の中の動き、そういうものが罪だと言う。

「だから、悔い改めなさい。毎日毎日、寝る前にはお詫びしなさい。今日一日、こんな悪い思いを懷いてしまいました。こんな酷い言葉をあの人に言つてしまいました。神さま、おゆるしくださいと、毎日毎日、寝る前に悔い改めて、おゆるしをいただきたい、それから眠りにつきなさい」

と。私はそんなにしたら眠れないですよ(笑)、もう神経衰弱になる。それが大体、牧師さんの言う悔い改めなんです。そしたら、毎日毎日が同じことの繰り返しなんです。毎日毎日が、「今日は罪を犯すのではないか」と。人に遭わなければいいんですけれども、人に遭つてしまいますと、そこで何かヒョイと発した言葉が、

「ひよつとしたらあの人を傷つけたかもしれない。ひよつとしたら、こうだと思つたことがあるいは間違つていたかもしれない」

と、もういつもビクビクビクビクして、オドオドしている子供の姿。これがキリストチャンになつてからの私の姿だったんです。始めは、もう救いが嬉しくて嬉しくて、解き放ちで、パーツとイエスさまの所に飛びついたんですけれども、今度、時間が経つてみると、

「お前はキリストに救われたクリスチャンになつた。クリスチャンは人々の前に模範でなければダメだ。お前の一挙手一投足を世間はみな見ている。お前が変なことをすると、神さまの栄光がけなされる。お前が神の子らしくすると、神さまは栄光をお受けになる。お前という存在はもやお前一個の存在ではない。神さまから遣わされた代表者でここにあるんだ」

と、そんなことを言われましょ。それで毎日毎日、悔い改めろと。それで私はもう生きてるのが本当にいやになりました。そこで小池先生に出会つた。

「もう根源的にお前という存在そのものが贖われてしまつているんだ。人間が自分の主観で信じよう、いい子になろうという、そんなことは棄てなさい。自分は何



もできないという、そこへ来なさい。キリストだって「何もできない」と言っているではないか」

と言われる。キリストは、「善き先生！」と呼ばれたら、

「私は善き者ではない。善き方は父のみ」

と言われた。

「私は何もできない。何も教えることがない。全部、父なる神が私の中で御業をなさっている。父が私に語られた言葉をそのままお取り次ぎしているだけだ」

と。キリストでさえそうなんだ。ましてや私どもは。だから、先生は徹底的なそういう自己否定です。それも、

「否定を自分でできないその弱さの自我、それが十字架で片づいているんだ。だから、無駄な抵抗はやめて、軍門に下りなさい」

「はい、参りました！」

と、「はい」と言えばいいんだよ。それが小池先生の福音だったからね。これは単なる解放どころか、解放であると同時に本当に引き上げてくださった。

「さあ今から聖霊の翼に乗って宇宙を闊歩かつぱしなさい」

と。「解放放つたからお前の力で歩め」なんて、そんなのではなかった。アルファからオメガまで全てが聖霊の御業。聖霊が十字架を示し、私を新しくし、そして聖霊が押し出し、聖霊が智慧を与え、お前の全てを担って、執り成して祈らしめている。祈りすらも自分からは出てこない。祈りすらも聖霊の呻き、導きなんです。

「言い難き呻きをもって執り成し給う」

という。それが凄い。

「先生、そんな楽でいいんですか？」

「そうだよ、わしは楽で楽でしょうがない」

と。憎たらしいことに、小池先生はいつもそう仰っていた。本当に皆さん、そうでしょ。

「眠くはなるさ。『疲れた』なんて、私は一度も思ったことはない」

なんてね。さんざん憎らしい台詞せりふを皆さん、お聞きになったでしょ(笑)。いや、あれが本当に先生の現実だと思います。でも、さびしかったんですよ、先生は。

「俺はさびしいよ」

と、時々仰つたんですね。それは生身の人間ですから、集会にいる時は楽しいけど、集会が終って、皆がサーッと散ってしまうと、やがてポツンと独りになって、「さびしいよ」と仰る。その時に意地悪に、

「先生、キリストだけで充分だと仰っていたではありませんか」

なんて、そんな意地悪は言わない、私は(笑)。そんなことは言いません。それが人間とい



うものですね。

ですから、キリストが私たちに下さった自由というのは素晴らしい自由なんです。

「本当にお前は問題なし」

と言われた人間にして初めて、

「それでは、思いつき走り走っていいんですね」

「うむ、思い切り走れ。私がついているから」

と。そういうふうになるんですよ。

東ドイツから西ドイツへ逃げて来た方のことをいつか話したかもしれませんが。私の若い頃ケルン大学で机を並べていた学生は東から逃げて来た。そしたら、絶えずキョロキョロしている。喫茶店に入っても絶えずキョロキョロしている。

「何しているの?」

と訊いたら、

「誰かが見張っていないか」

と。密告するんですね。だから、友だちと会話をするのさえ、誰かに盗聴されていないかと、オドオドオドオドしている。

だから、十字架の福音を聞いても始めはオドオドかもしれませんよ。でも、

「聖霊の導きによつてあなたはもう思いつき安心していいんだよ。思いつきり平

安の中に安らぎなさい。本当の生命を与えたんだから大丈夫だ、大丈夫だよ」

と。それを絶えず集会ごとに聞かされて、それで段々過去の恐怖は過ぎ去って行くんです。神さまの救いは瞬間的ですけど、肉なる私たちは、肉体を持つている私たちはやっぱり、はめこまれたものがありますね。子供の時のいろんな、トラウマというものがありますよ。そこからはなかなか現実には解き放されません。神さまは解き放っておられるけれども、我々の体はトラウマを覚えこんでいますから、その他いろんなものを覚えこんでいますから。そこから本当に自由になるには年月がかかります。絶えず集会に行つて、福音の言葉を聞いていなければいけない。せつかくの福音の言葉が、いつしか昔のトラウマによつて消されて、また元の木阿弥もくあみということになりかねないんです、我々人間は残念ながら。向こうの世界にいけばいいですよ。向こうの世界に行くまでは、そういう意味の戦いがある。旧きやつはいつまでも体の中に残っている。霊の次元では解き放たれているんです。肉体の次元においてそれが絶えず甦よみがえつてくるんですよ。

ですから、それに打ち勝つて、いつも神さまの言葉はそれより強いと。

「神さまはお前を愛しているよ。お前はもう絶対にゆるされてる。お前の罪はも

う過去・現在・未来、全部贖まほわれている。お前は全く無私なる、罪なき全く眩まぼゆ

存在にされている。私が保証するよ」

という、そういう福音の言葉を絶えず聞いていること。それが染み込んでいつて、遂にこ



の肉体のトラウマに打ち勝つという、そこへ来るまでは、肉体を宿としているかぎりには、パウロだつてピリピ書で言ってますよ。

「やっぱりキリストと離れていることを実感する。だから、早く肉体を去つて御許へ行きたい。しかし、こうやつて残っていることが皆の助けになるならば、私はやっぱり残った方が良いかな。どうしたらいいのかな」と言ってますものね。これが現実の人間なんです。

ですから、我々は一方では福音の物凄い力を味わうと共に、現実の人間は弱い人間だという自覚も当然必要です。だからこそ、また他の弱い人の友だちになれるんです。一気に強い巨人になってしまったら、もう弱い人の友だちになれないですもの。どこまでも、一番低い所においていつて執り成して、

「一緒に歩きましょう。二人三脚で行きましょう。私が背負いますよ、一緒に行きましょう」

と、そういう^{いたわ}労りの心という、やはり同情する、病と一緒に背負うという、そういう気持ちというのは自分が弱くなければ出てこない。そしてそれを全部キリストにあずける。

だからそういう、キリストと一緒に、聖霊と一緒に歩くあゆみが始まつてからは、初対面であろうが何であろうが、どこで何をしてましても、一緒に主さまが歩いて働いてくださいます。祈るのも、何も^{ぎょう}仰々しく祈るのでなくて、人と対面しながら祈つてその人を見ますと、そこにキリストさまが、聖霊さまが働いてくださる。どなたであつてもそれは可能なんです。何も私が特別ではない。どなたにだつて無条件なんです。どなたにもそれは^{かな}叶います。そういう所へと導いてくださっています。「その条件は？」というと、平伏しあるのみです。

「主さま、私は何者でもありません。あなたが全てでございます」

と、これなんです。明け渡しです。明け渡していけば、ひとりでに働きます。自分が立っていますと、働けない。自分が邪魔しているから。「立派になろう」とか、「何々しよう」とか、そういう「わが^{はか}計らい」、私の計らいというものを全部棄て去つて、

「主さま、あなただけです」

と。本当に空っぽになつていれば、ひとりでに上からくだつてきて、そして御業をなさつてくださる。これは万人においてそうですからね。

「先生は特別だ」

なんて、絶対に思われなくてください。

私は、小池先生のような、ああいう劇的な聖霊体験がなかったものですから、「ダメだ、ダメだ」と長い間、思っていたんですよ。それでも、神さまの御業が先に先行してしまいますと、そんな「聖霊を受けるの、受けないの」と、そんなことではないということが分つてしまいました。人によって聖霊体験はさまざまです。言うならば、毎日毎日が聖霊をい



ただいている。

だから、「聖霊体験」と仰々しく言うのは、却って躓きになる。先生においてはそうでした。でも、先生の導きを受けた我々はもうお話を聞きながら、聖霊体験をしているんです。聖霊を呼吸することですから、聖霊をいただくことですから。

小池先生は、祈りを導く時に、

「沈黙で祈りなさいね。深く深呼吸しなさい。吐く息で古い口を吐き出すんですよ。吸う息でキリストの霊気をいただくんですよ。それを繰り返しなさい。十字架を瞑想しなさい。ひとりでに聖霊が中へ入っていらっしやるから。楽になったでしょ。大声を出して祈らなくていいですよ。深く瞑想してキリストを待つて、その中に自分をあずけて、キリストの中へ入っていくんですよ」

と。そういう祈り。それだったら、どこでだってできます。どこでだって、

「主さま、主さま、主さま」

と、これでいい。そう口で言いながら、主さまを念じて、

「主さま、ありがとうございます。主さま、ありがとうございます」

それ以外に何がありますか、「主さま、ありがとうございます」の他に。祈るとしたら、「どうぞ、あの姉妹のためにお祈りいたします。どうぞ、あの姉妹が今、病をかかえておられますから、あの姉妹の中にあなたが飛んで行つて、入つて、力付けて救い上げてください」

という、執り成しの祈りですね。先生もある文章で、

「自分が、ある方のために祈る時は、そこへ自分は飛んでいって、その方と一つになつて祈るんだ」

と書いておられる。全く同じです。そういうふうになつてしまふんですね。自分のためには祈ることは何もあります。せめて、

「主さま、三日後に講演会があつて、私は困つております。助けてください」とか。三日前に必ず後悔していると言つたでしょ。

「助けてください。全くあなたにあずけてやりますから」と、その程度のことです。

●信仰の本質

そして次は、飛びまして250頁。間には藤井武先生のことをいろいろ書いておられるけれども、そこは飛ばします。「信仰の本質」という所。

《信仰の本質》

私はおそれる、人は余りに多く「信仰によつて救われる」と云う。人は往々にして信仰が何ものであるかの如く考えはせぬか。信仰が人間の側において問題となつて



居りはせぬか。信仰の強弱と云う如きことが顧みられるのではないか。信仰は確信ではない。人の心のわざではない。信仰はそれ自身、神のわざである、神の恩恵のはたらきである。恩恵（キリストの）が信仰の源であり、力である。神の言が呼びかけるところに信仰が生じ、キリストのいのちが動くところに信仰が湧く。

神さまが主体だと。神さまがいいようになさるから、それにお任せしておればいいんだと。次の頁、

……かくして第二の路は真に神の路であって、

神主体の路である。神さまが主人公である。「神の路」、神さまが働き給う路。

人間の側から「神の路」などと勿体振って唱えるような、なまぬるいものではない。

神の側からの、神自らの路、神一切の路、神の独専的な路である。我れには立場なき路、奴隷の路である。

つまり、神さまの御意のままに動くという、そういう意味で、この「奴隷」というのはそういう意味ですからね。何も人格的に、人格が否定されているのではない。神さまの御意のままに動くという意味ですから。

人間はこの途上では神の道具である。

「道具」というのは、「道のために具えられた器」という意味ですから、非常に尊い概念なんです。道ために具えられたもの。神さまの道が成就するように私を投げ出して、「お使いください」と言って差し出している。そういうのが道具なんです。神さまにお使いいただくというのは大変な光栄ですよ。

自らを神の道具に過ぎぬとなすところ、人格の否定のこの立場において、実は始めて人は神の人格に面接し、そのいのちと力とを自らに現わし得るのであり、かの哀れむべき蒼白の理性の人格とは異なる。……そこでは却て信仰という自意識すら退くのである。……

全く独一な意味に於てイエスの歩み方は神一切であった。「我はわが意をなさんために非ず、我を遣わし給いし者の聖意をなさんためなり」と云い、「わが教はわが教に非ず、われを遣わし給いし者の教なり」と云い、「己より語る者は己の栄光を求む、己を遣わしし者の栄光を求むる者は真なり」と云い給った。

これは要するに、無者キリスト、無者イエス、「自分はナッシングだ」と、神さまの前に自分を明け渡している、そういうキリストのお姿をここで述べておられる。信仰というものは、そのように人間から出たものではないということ、ルターは「神の独占活動」と言いましたし、カルヴァンは「予定説」と言う。救われるのも神さまが、生まれる前からご予定なさっているから救われるので、その人から出たものではないということ、カルヴァンは言ったんです。それから少し飛ばしまして、253頁の真中の所。

……げに、信仰は神一切、キリスト中心ならんため、常に人間の要素に対して「否！」



を叫んでやまぬ天来の抗争力である。》

人間は人間を立てようとする。それに対して「否！」と天からの力が逆らって戦っている。天と地との戦いだと、こういう捉え方をしておられます。

●旧約の預言者

そして、「旧約の預言者」という所の書き出しが、

《旧約の預言者》

信仰は天来の抗争力である。

と。預言者というのは実にそういう人たちであったと。イザヤだってそうですね。その他、預言者はみな神さまに呼び出されて、

「私なんかとてもその器ではありません」

と、逃げ回っているんですよ。ところが、

「いや、そうじゃない」

「いえ、私は汚れてます」

と言うと、パツと炭火のようなものが飛んできて、唇をサツと触った。そして、

「お前は潔められた。さあ、立て！」

と、イザヤは言われた。モーセのときは、

「いいえ、私は無学な者でダメですよ、言葉もヘタクソです」

「アロンという奴を遣わすから、彼がお前の口となる。お前は言うことを聞け！」

と。神さまの方にみんなねじ伏せられて、捕まえられたのが預言者です。

モーセは、初めはそうではない。血気盛んなモーセは、パロの宮廷で育って、しかし自分の身分はヘブライ人でエジプト人ではないということに自覚して、ある時、自分の同胞がエジプト人にいじめられていた時に、エジプト人と喧嘩して、エジプト人を打ち殺した。今度は、その同じ同胞が喧嘩して、そこへモーセが行って、

「お前たちは仲間ではないか、同じ民族ではないか。喧嘩するんじゃないよ」と言ったら、

「お前はモーセか。昨日、エジプト人を打ち殺したな」

と言われたから、バレたと思ってモーセは逃げて行く。遙か彼方のミデアンの荒野へ行って、そこでエテロという祭司の所に匿かくまってもらう。そのの娘さんと結婚して、そこで羊飼いになって40年過ごす。自分は同胞を救おうと思ったけれども、その同胞が私に歯向かってきた。

「お前は昨日、エジプト人を殺したな。いったいお前は何様だ。俺たちの裁判人さいばんにんとなるのか」

と言って歯向かって来たものですから、モーセは逃げた。つまり、私の理解によれば、血



気盛んなモーセが自分の意志で同胞を救おうという、その正義感。それが美事に碎かれてしまつて、モーセは無力になつて逃げて行つた。そこで穏やかな羊飼いの生活を4年過ごした。80歳になつたモーセは、ある時、羊を牧つていると、向こうに柴の木が燃えている。しかし、燃え尽きない。「何だろう?」と思つて近づいて行くと、御声があつて、

「ここは聖なる地である。お前の靴を脱げ!」

「ああ、あなたはどなたですか?」

と、そこから始まつたんでしょ。

「我は有りて在るもの。在らしめる者である。私はお前をエジプトに遣わす。

同胞をあゝの苦しみから助けませ!」

「いえ、私は無力な者で何もできません。そんなことはとんでもありません」

「私がついているから、大丈夫だ」

と。そうやって杖を渡す。その杖がいろんな奇跡を起こすわけです。その杖一本でパロの所へ行つたんですからね。それがあの出エジプト記の3章から始まつている。

いつペンモーセはペシヤンコになつて、「私はダメです」と言つて、荒野へ行つて晩年を過ごして80歳になつた。奥さんも子供もあるモーセに神さまが臨んできて、「お前を使う!」と。そして、40年間モーセを通して、パロからの脱出、そして出エジプト、荒野をさまよつて、ピサガの頂きで天界に召されるまで40年間、120歳であのモーセは逝くわけです。始めの三分の一の40年の時代、その次の40年の時代、それから最後の40年が真に預言者モーセという働きの時代です。だから、神さまのなさることは、そういうふうな凄いです。パンなんです。120歳は、決してあの当時の人たちにとっては不思議な年齢ではない。大体、自然年齢なんです。ね、120歳というのは。

そのようにしてモーセは用いられた。それから、預言者のイザヤとか、エレミヤとか、そういう方々はみんな神さまにねじ伏せられて、「これでもか、これでもか」というようなものでね。そして、神さまの御言を伝えると、人々は「フーン」といつて聞かないから。その板挟みになつてどんなに苦しんだか。だから、決して預言者たちというのは、自分から神さまをつかまえたのではなくて、ある日、神さまが突然現れて来て、

「お前を捕まえた、お前を用いる!」

という。アモスだつてそうでしょ。羊を牧つていような、弱々しいアモスが義を宣告する役目を賜るんですから。ホセアは心優しい人ですし、そういう預言者の実存というのがここに出てまいります。253頁から。こういう人たちが神中心の信仰の源流であると。

……預言者の信仰の態度が最も本源的なのである。即ち、彼らは神の言ことばあるを知つて己れの言を知らなかつた。神の言をきくことが同時に信することであつた。信することことがまた同時に従つことであつた。

従うというのは行動することですね。聖旨みむねのままに行動する。



人間の頭の中での翻訳の余裕が彼らにはなかった。神の言は彼らにとっては厳として力であった。いのちであった。神の霊的人格そのものの圧倒であった。……彼らは神の意志により、その生涯を目茶々にされた。ということが書いてありますね。

● 預言者の信仰の実存

そういうそれぞれの預言者は——これはいちいち読みませんけれども——235頁の所にまづアモスです。彼は「桑の樹を作る者なり」と。それが召されます。それから、ホセア、これは散々な結婚の体験ですね、「淫らな女性を妻に娶れ」と命じられて、そしていろんなことを体験させられた。それからミカ、イザヤ。イザヤも第一、第二、第三イザヤとあるわけです。258頁の始めの4行目から読みます。

《預言者の信仰の実存》

……これに反して、神に呼ばれ、神に動く生活は、人の目にどうあろうとも、唯その故に、限りなき意味と従って替え難き価値とを有するのであって、徹底的神本位の人生がそこにある(48・11、51・6)。おのずからなる神讚美がそこに湧く(55・12、13)。何ものもこれを奪うことの出来ない力(50・5、10)と希望がそこに輝く(61・10、62・5)。この神の側からの思惟の方向、恩恵の思惟、信仰、これはいかほど強調されるも足りぬ。預言書なるかなと思っただけである。

そして特にエレミヤのことが詳しく出てきます。エレミヤは本当に心優しい人であった。神さまに「もう勘弁してください」と何遍もお願ひするけれども、神さまはゆるさない。「預言しろ、人々に告げよ、語れ!」と。語ると、人々から責められる。「もういやです」と言っただけで黙っていると、神の言葉がうちに燃えて苦しい。そういう体験をします。次の259頁の終りの行を見てください。

……あの弱き人エレミヤをひっぱり廻わし給うたのである。げに「弱き者は苦杯を飲み干すべく」立たしめられたのである。

これは藤井先生の文章ですね、奥様を失われた時の文章です。

かかる「別の路」において神が人に課し給う問題はしからば何であろうか。《
ということ、次の「終末的現実」、ここからが今日の主題となつてきます。ここまでは前回のおさらいだったけれども、おさらいでありながら、おさらいのもっと深い所を今日は語らせていただきました。》

● 終末的現実

エレミヤを引かれまして、エレミヤは民の罪を己が罪として背負った。神さまの痛みを自らの痛みとして味わった。「愛は痛むのである」と、人が罪を犯しているというので、神



さまは痛んでおられるという。北森嘉蔵(1916～1998)さんという神学者が『神の痛みの神学』という本をお書きになった。それを意識しておられるから、「痛み」ということをここに引いてありますね。260頁の終りから4行目。

《終末的現実》

……エレミヤの杯はエホバの言で溢れた。それは「口には甘く」あつたが、「腹には苦く」あつた。それゆえ彼の痛みはやまず、彼の傷は重くして癒えなかつた。神は工レミヤにとつて恰も水をもたずして人を欺く溪河たにかわのようであつた(15・18)。神は彼を苦しめざるを得なかつたのである。それは何故であろうか。

「それは人の背きの故に」ということが出てきます。そして次の261頁の7行目から深刻なことが書かれています。民は全然、受けいれないで、鉄面皮であつた。そういう者に対して神さまの審判はどのように臨んでくるかということが次に書かれます。

……さりながら実はそこに神の審判が時々刻々地上に出現されつつあつたのである。それと同時に神の隠れた審判は天に積まれつつあるのである。恰も、いつかは知らず大雪崩なだれとなつて崩るべき雪の華が、音もなく降り積もるが如く、神と世との終末的接面の軋きしりがそこに在る。此の如き地上の審判は、これを向けられた人々にうけられずして、神を相手に生くる人々に感ぜられるのである。神の憤りや憂いや重荷が斯かる人々に懸つてくるのである。》

神を求める人たちが、いわれなき苦しみを背負わされている。こんな不合理なことがあるものか。それが現実だと。それは終りの時にハッキリすると。同胞の罪を、もちろんキリストは背負つてくださったけれども、キリストは常に同胞の一人として、自分の同胞の罪を、義なる同胞が背負わされているという、これがこの世の罪の現実である。

「そんな不合理な不条理なものだったら、クリスチャンなんか絶対にならない」と、世間の人はそう思いますよ。神を求めて神さまに生きるということがそんな苦しい道を歩まされるなら、そんな勘定の合わないことをやらされるなら、そんなのはもう、せいぜい地上では好き勝手なことをして、死ぬ瞬間に「主さま、おゆるしください」と、それでスツと済めばいい、この方がいいに決まっていると、人は思うでしょう。けれども、そうではないんですね。そうじゃなくて、本当に神さまを求めて歩む人は、いわれなき苦難を背負っている。これは人の罪を背負っているからだ。それによつて神の世の審判が今こないで引き延ばされている。それでもなお背き続けていたら、それはどうなるか。これは誰にもわからない。ペテロも言ってますね。

「イエスさまは、もう直ぐにも神の国が来ると仰つた」と。パウロも、

「すぐにも審判が来る。だから、目を覚まして祈っておれ。盗人のごとく神の国の迫りがきている。それは明日にも来られる。だから、乙女は結婚しない



「で、おけ」

と言った。あれは何も結婚反対ではない。

「明日にも主は来られるのに、今、結婚して——結婚することは、夫がいろいろなことを要求してくるから、そのために心をくだかねばならない。子供のために心をくだかねばならない——そんなことで煩わされるよりか、結婚しないで乙女のまままでキリストを迎えようではないか」

と、パウロは言った。そのくらい明日にも御国は来ると思っていた。キリストだって、

「私が再び来る時には、あなたの方の中にまだ生きている人がたくさんいるよ。」

「死なない者がいるよ」

というようなことを仰った。そのくらいイエスさまも、パウロもみんな

「明日にも神の国は来る。だから、今の地上を本当に神ひとすじに生きよ、キリス

トひとすじに生きよ」

と、こういうふう呼びかけていたんです。決して「結婚反対」とか、「この世の世界はどうでもいい」とか言っていない。「明日にも来るから」という、そのつもりが延びているには訳けがあると、ペテロは言ってますね。

「二人でも救われる人が多くあるように、そのために神はその日を延ばしておられる。一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。だから、私と同じ気持ち

ちで神の御国の到来を待とうではないか」

と。これが「終末的実存」という姿なんです。「明日にも御国がくる」という、その心構えです。しかし、我々は地上に根を下ろした人間として、この地上を生きる。我々の個体自身も明日にも死を迎えるかもしれない。我々の個体自身が危機に瀕しています。乗った飛行機が落ちるかもしれない。いつ大地震にみまわれるかもしれない。いつどんなことで、放火された電車に乗っているかもしれないというようなことで、身の回りの現実というのは、いつでもどこで何が起こるかわからないという、そういう一つの個体としての危機、終末に面している。それから、歴史という、人類というものは神の審判という終末に面している。そういう中で私たちはいかにして一日一日を生きるか。これが

「終末的実存を、終末的現在を、終末的現実を生きるとはどういうことか」という先生の問いかけなんです。

この自覚を持たないクリスチャンというのは、

「明日もまた次の日の如くならん」

と、永遠に時間を進めていくと、緊張感がなくなるんですね。そうではなく、絶えず緊張感をもって、二千年前のあのイエスのいらつしやった時代と今とは質的には少しも異ならない。しかも、それは私においては十字架が迫っているからです。終りが迫っているというよりもむしろ、さっきのあのゴルゴタの十字架が、あの木の十字架が朽ち果てても、



霊界の光輝く十字架が目の前に迫って、そして、

「お前は常に新たにせられている」

と。そして、その背後からキリストが微笑んでくださっている。そういう迫りがある。だから、質的にちつともあの時の祈と、今の赦しとは変わらない。そして、キリストは

「私は今日も明日も次の日も進み行く。後を顧みないで、前に向かって一緒に進む」

と。そして、引つ張ってください。天に向かって旅している。そして、

「私があなただを背負っているんだから、あなたは大丈夫だ」

と。そういうふうな、御霊の担いをいただき、御霊の生命をいただき、御霊によつて引き上げられていく。

小池先生は自分を釣鐘だと仰った。「天鐘」と。首根つこを把つかまれているから、足場、立場を持たない。ブランブランと宙ぶらりんだ。東洋の鐘は、中は空っぽだと。そして、外からゴーンと撞木でつきますと、ゴーンと響きわたる。それは内なる空気と外なる空気が響和してゴーンと響く。中は空っぽ、空気だけが満たしている。この空気というのは霊気に、聖霊の気に通じる。我々は自分の足場、主義主張や立場を持たない。首根つこを天からの綱でしっかり引つ張っていただいて、ブランブランと空中に漂っている釣鐘だめと。だから、神が撞いてくださると、ゴーンとえも言えぬ響きを発する、天来の響きを発する。そういう存在でありたいと言って、先生は永いこと「天鐘」という号を使っておられた。

「西洋の鐘には中にベロがある。だから、ガランガランガランと音をだす。東洋の鐘はベロも何もない。中は空洞だ。しかも地面で支えられていない。天から吊り下ろされている。正にそれがキリスト者の姿ではないか」

と。こういうふうに言われた。それで「天鐘」という号を名乗られた。天からぶら下げられた鐘だと。

「私は空っぽです。神さまが撞いてくださると、天が鳴るのか鐘が鳴るのか、わからない。そういう天地一如の姿だ」

と。これを言われた。だから、そういう意味では、非常にある意味では楽観的、楽天的な人ですけれども、ここに書かれていますのは、非常に深刻な面が書かれています。そしてまた、これはある面ではその通りなんです。もう少しこれを読んでいきます。

《此の如き地上の審判は、これを向けられた人々につけられずして、神を相手に生くる人々に感ぜられるのである。神の憤りや憂いや重荷が斯かる人々に懸つてくるのである。これは神との人格的交りもたらが齎もたらす必然の結果である。それは実に神と「共になやむ」(mit-leiden) による。しかも人は如何なる義人といえども同胞に対しては、「共に犯せる者」(Mitschuldiger) である。》

キリストはあの姦淫の場で捕えられて、前に引き出されてきた女性に対して、



「私もあなたを罪しない、罰しない」

と言われた。あのキリストが「私も」と言われたところに、

「私は義しい人間で、審く資格がある。あなたは罪びとだ」とは言っておられない。

「私もあなたと一緒にだよ」

というふうには、罪無きお方が、その石打ちさるべき女性と同じ立場に身を置いて、

「私もまたあなたを罰しない」

と言って、担っておられる。そして、

「罪無き者、先ず石を打て」

と仰った。誰も石を打てなかった。みんな去って行った。その時に、

「私もお前を罪しない。これからは罪を犯さないように」

と言われた。これがその人の罪を「己が罪として背負っている」という姿です。

さればこそエレミヤも祈った、「我々の背反は大なり、我ら汝に罪を犯したり」(14・7)。むしろ義人は罪を自覚することに於て、より深いのである。斯く同胞の罪を罪とし、神の審判を受け、反対に同胞からの苦難に遭い、神の憂苦を憂苦としなければならぬところに、別の路を歩む人の宿命があり、課題が横たわっているのである。

それは神と共に歩む義人に於て何か誇るべきところがあるからではない。義人はどこまでも神の故に神のために別たれた人であり、撰えらばれた者である。彼自身は何でもない。それ故にこそ神の絶対の愛であり、恩恵めぐみなのである。神の恩恵は必然おのずから何もかもを要求するものである。

「多く与えられたる者は多く求められる」とありますね。

そしてその要求は使命として自覚される。しかも実に神は要め給もとつより以前に与え給う方なのであった。

使命を与えるということは、必ずそれを達成する力を与えてくださる。道を具もえてくださる。「お前の力で」とは仰らない。「私がお前と一緒にいる。私がお前に力を与える。だから、お前は行け!」と。モーセもそうでした。

さればこそ神は要求しつつ、負うべき原動力を与えつつあり給うのである。それ故人はこれに耐え得るのである。神の愛は強い。

苦しむとは、この路をゆく人にとって、神の愛を生きることである。それは特権であり光栄である。神と共に歩く人生とはそれだけ神聖なものである。神がこの別の路において課し給う問題とは即ちこれである。しかも問題の解決と力とは此くの如く既に与えられているのである。地上の生涯の如きはどんなに悲惨でも、否いなそうであればあるだけ神の深き愛の聖業に参与しているのである。ヨブ、ホセア、エレミヤの如きは、極めて著しき苦難と愛の殉教者であった。愛はこの路の究極の内容である。それはた



だ神と共に死につつ、神と共に生きつつあるこの路に於てのみ可能なる愛である。

そして、イザヤ書53章が次に出てきます。次の263頁。

「彼は侮られて人に棄てられ、悲しみの人にして病患を如れり。まことに彼は我らの病患を負い我らの悲しみを担えるなり。彼は我らの咎のために傷けられ、我らの不義のために碎かれ、みずから懲罰を受けて我らに平安を与つ。」

彼は苦しめらるれども自ら謙りて口を開かず、屠場に牽かるる羔の如く、毛を斬る者の前に黙す羊の如くその口を開かざりき。彼は虐待と審判とによりて取り去られたり、その代の人のうち誰か彼が活ける者の地より絶たれしを思いたりしや。

彼はおのが魂を傾けて死にいたらしめ、咎ある者と共に数えられたり。彼は多くの人の罪を負い咎ある者のために執り成しをなせり。》

全くこれはイザヤという、キリストがおいでのなる数百年前に、イザヤを通して告白せしめられた文字なんです。イザヤ自身が誰のことを預言しているのかわからないんです。ある民族であることもありません。イスラエル民族がそういう役目をするんだ」という理解もあります。けれども、もつと深い理解は、主イエス・キリスト、イエスさまがこれだと、イエスご自身がこれを自ら受けとられて、

「私はこの神の僕としてこの道を行く」

という自覚を持たれた。それから私は更に言いたい。いろんな無名のキリスト者たちがこういう人生を歩まされると。

「キリストの苦しみの足らざるをなお私は満たそうとしている」

と、パウロは言いました。さっきのヨブ、ホセア、エレミヤなんかも、そういうふうな意味で、自分の罪ではなくて、人の罪を背負うという役割を担わされた。だから、決して「キリストだけ」とかいう必要はない。キリストを中心にしながら、キリストにつながるいろんな方々において、こういう運命を、あるいは深刻に、あるいは少しは軽やかに負わされる。そういうふう思う。

●私の孫の翔の姿

私はこれを前回も言ったんですけども、私の孫の翔の姿をここに重ねざるを得ない。今は16歳になろうとしています、この5月で16歳になります。段々その先天的な筋ジストロフィーの病は重くなってきました。10歳になる下の衡平ちゃんの方はまだ体はピンとしますし、もちろん一人では支えられないですけども、一応ピンとしている。手足も少し動く。まだ非常に体も軽くて自由自在なんですけれども。上の子はもう本当に体が段々曲がってきてますし、重いですから、そんなにいつも外へ連れて行ってやることもできないし、室内で過ごすことが多くなっています。室内でもどうしても背中が曲がってくる。同じ歳の養護学校の子供たちは、肺が圧迫されて気管切開したり、そういうことを経験し



ています。召されていった子供もあります。この翔の場合にはまだそこまでいかない。時々、風邪なんかにおそわれますと、痰がつまったりとか、自分で吐き出せない。そういうことが時々ありますけれども、まだそういうところまで行ってません。たえず車椅子の机の所で、こういう恰好でテレビを見たり、テレビゲームをやったりしておりますが。私が時々行くと、「おじいちゃん、会いたかったよ。おじいちゃん、来てくれてうれしいよ」とか、まず言うんです。私が感心しますのは——それは常時一緒にいませんけれども——私はあの子から呟き、嘆きの言葉を一つも聞いたことがない。

「誰のせいでこうなった？ あの子たちは跳びはねているのに、自分は動けない」とか。一回だけ、

「歩きたい」

と言ったことはありましたけれども。一回だけでした。小さい時は、小さな靴を手にして、それを投げて、「歩けたら」というような思いは吐露したことがあるんですけども。先ずは人をうらまさない。全然、人を恨んだり、ひがんだり何もしない。自分のその不自由さがかこつて愚痴をこぼす、そんなことを聞いたことがない。何かがあると、

「お母さん、これをして。誰々さん、これをして」

と、自分で体を動かさせませんからね。同じ姿勢でいると床ずれが起こつたり、痺れてきますから、「動かしてくれ」とか、そういうことは言いますけれども。とにかく、けなげというか、本当にこのイザヤ書53章の姿にそっくりなんです。気持ちは物凄くやわらかく優しいですし、愛の心を持っています。外に出ている時はいつも人には微笑んでいましたし、誰かに何かをしてもらおうと、

「ありがとう、ありがとう」

と言って、ことごとく自分の親であろうと誰であろうと、いつも感謝していました。そういう姿を私は見てまして、なぜあの子がああいう病を背負っているかということをおいまして、イザヤ書53章を思わざるをえないんですよ。彼は別に人に棄てられたわけではありませんけれども、病を知っている。

「彼は侮られて人に棄てられ、悲しみの人にして病患を如れり。まことに彼は我らの病患を負い我らの悲しみを担えるなり。彼は我らの咎のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰を受けて我らに平安を与う。彼は苦しめられるれども自ら謙りて口を開かず、屠場に牽かるる羔の如く、毛を斬る者の前に黙す羊の如くその口を開かざりき。」

彼は苦しみがあるけれども、口は開かない。羊のごとく黙って文句を言わない。そしてやがて召される日がきます。

彼はおのが魂を傾けて死にいたらしめ、咎ある者と共に数えられたり。彼は多くの人の罪を負い咎ある者のために執り成しをなせり。」



と。この執り成しの姿です。何かそういうものを思ってしまうんですね。だから、それだけに、彼はこの地上の生を終えたら、直ちに天上で輝きます。地上に居ながらにして、天使なんです。天使の姿を示しているんです。そしたら、もう天上へ行ったら直ちに輝く。翼をいただいて飛翔する。「翔」というのは「羊に羽」と書きますからね。そういうふうに私は思っています。

神さまの实在界というのはいく世界なんですよ。何も私は理屈で自分に言い聞かせて、納得しようなんて絶対思っていない。そうじゃない。それが正にリアリティ、現実はそのだと。聖霊がすべてをなしてくださったと思わざるをえない。そういうふうに、小池先生も天界にいらっしやいます。我々の生きているこの地上というものと天界とは直ちに直結している。ただ見えないだけなんです。目が開かれれば、そのさまがきつと見えるんでしょね。

サンダーシングなんていう人は時々、目が開かれて、見たんです。インドでいわゆる土着の人たちの所へサンダーシングが行って、土着の人たちが「あいつは何者だ」と言って、手に槍を持って襲いかかってきたことがあった。ところが、サンダーシングの20メートルほどの前の所でピタッとそれが、夜ですよ、止まってしまった。それからしばらくして引き上げて行った。翌日、何があったのかと聞いたら、

「あなたの周りに無数の天使が取り囲んで、眩まばゆくてあなたをやつつけることができなかつた。あなたは高貴なお方にちがいない」

と。そういうことは本人は何も知らない。けれども、彼らの目の前には、天の軍勢が眩い姿で護っていたという。それが見えたわけですね。そうやって神さまは時と場合によって、目を開いて、霊界のことを見せる。日頃は閉ざしている。私たちは肉の目ではそれを見なければ、御言とかいろいろなことを通して、

「まことに然り。そうであるに違いありません」と。これは信じ込むではありません。

「そうでなくてどうしましょうか」

という、そういうった納得というか、腑ぶに落ちるといって、理ことわりと申しますか。

「神さま、あなたの世界は正にこれだから、いいんですよ」と、こう言えるような、そういう安らぎを与えてくださるんです。

ですから、私はそういう自分の孫の姿を見まして、必ずあの子は天上で輝く。今、地上にいて、きつといろんな子供たちのことを執り成しているんだと思います。大人でなくて、同じような病の子供たちの執り成しをしているのだと思います。

母親は、つまり私の娘ですけども、言いましたよ、

「キリストの御力でこの子だけが奇跡的に癒されることを私は望まない。癒されるなら、みんな癒していただく。養護学校にいる子、学校にいない子、世界中のそ



ういう重荷を負っている子供たちが全部癒されるなら、癒していただく。けれども、この子だけ特別扱いして癒していただくことは思わない」と言いました。これも凄いことなんです。

私は始めのうちは、あの箱根なんかで夏の特別集会をやった時に、1988年頃のあの時は、なんとか小池先生に祈りの力で癒していただきたい。私も、「きつと癒される」と、そんな思いで一、二年過ぎました。けれども、ある時から小池先生はそういう癒しを祈られなくなった。私も癒しを求めなくなった。すべてをお委ねするようになった。だから、癒される、癒しを求める、そういうレベルではないんです。御意ならば主はなさいます。だから、小池先生は、病める人に手を按いて祈られる時には、癒しを求められない。

「主さま、あなたの大生命力がこの方の中に流れこんでください。主さま、あなたがこの人と一つになつてください」

とそうやって祈られる。その結果がどう出ようと、そんなことはキリストのなさること。

「あなたが入ってください」

と。私も翔ちゃんに手を按いて祈る時は、いつもそういう角度で祈る。やがて、あの子はもうぼつぼつキリストのことを話しても受けとつてくれる年頃だと思しますので、話してやりたいと思いますけれども。

「主さま、本当にあなたの十字架をこの子も一緒に背負っています。どうぞ、祝福してやってください。あなたの内的な平安を与えてください。そして、同じ様な苦しみにある子供たちを、どうぞ、慰めてください」

と、そういう角度で祈りたいと思っています。だから、もう私にとっては天地一つです。地上にありながら、魂は天上に繋がっています。キリストさまはいつも私の所にそういう形で来てくださって、聖霊となつて導いてくださる。

だから、私は裁判所でお仕事をしている時であろうと、大学で働いている時であろうと、どういう所でも人間としての私は同じなんです。私の根底にあるものは同じだから。それが裁判所で働く時は、

「主よ、曇りなき目で物事を正しく見させてください。正しいものを正しいとし、誤れるものを誤れるとする正しい判断力を下さい」

と、そうやって祈って判決をいたしますし、またそっちへ行けば、そっちへ行つて、「主さま、どうぞ、お用いください」

と。どこにいても同じです。昔は、

「学問の世界とキリスト教とどこでどう繋がるのだろうか？」

と思つてね、特に法律学なんていうものは正にドロドロした娑婆を相手にする社会の学問と、キリスト教の高次の世界がどこでどう繋がるんだろうかなんて、苦しみましたけれども、今はもうそんなことは全然ないんですよ。主さまがいいようになさってください。



「どこへなりともお遣わしてください。私は空っぽになって参りますから。為し給うのはあなたですから」

と。そうすると本当に楽しいと申しませうかね。

●天路

もうちよつと先まで生きましよう。もう終わりますから。263頁の「天路」という所。

《天路》

この第三の路、否むしろ諸々の「あれ」なる路に対する唯一の「これ」なる路、この「別の路」こそ、十字架を負って、復活の大生命によりがえる路、地獄、浄罪山を経めぐって天界に天かける路、地路を絶して天道に突入する路である。天道がすでに地上に投影している地路であるから、天路と申したい。

こういう路を歩いたのが藤井武先生であったということ、藤井先生のことをずっとお書きになって、それから、この頁の終りから4行目、

我々はこの現代の滔々たる偶像崇拜のあだ波とその禍の根本であるところの自己欺瞞の人間中心主義の狂風に対して、神中心の泰山の上、十字架の巖のかけに心の腰を据えよう。我々の路の一切のくるしみもなやみも、神の力、キリストの愛には勝てない。しかも苦しみの中に感謝がこぼれ、悩みのかげに愛が流れる。愛の声はこつだ。我最早生くるに非ずキリスト我がうちに在りて生くるなり！

この、

「十字架の巖のかけに心の腰を据えよう。我々の路の一切のくるしみもなやみも、神の力、キリストの愛には勝てない。」

というところは、今の先生だったら、「聖霊」と仰る。

「聖霊が十字架を通って私たちの所へ来てくださって、聖霊がすっかり包んでくださって、我々はその中にすっぽりと包まれてある。聖霊が執り成し、聖霊が慰め、聖霊が力を与え給う」

と、そういうふうな力強く、今だったら仰いますが、この時にはまだ「聖霊」という先生の自覚は希薄ですから、聖霊のことは出てきてないでしょ。「神の力」とか、「キリストの愛」とか、そういう言葉は出てまいりますけれども、それを現実には我々と共に悩み、共に祈り、そして慰め助けてくださる「助主」「慰め主」、これは正に御霊のまさま、聖霊という姿のキリストの分身なんです。そういうことなんです。それから次の頁の、

アベルの軀をめぐりしものが大地より叫んでより、

「アベルの軀をめぐりしもの」というのは「血」のことです。血液のことをこんな詩的な表現で仰った。アベルはカインに殺されて血を流しましたから。

人類の歴史がいつか突如その終幕に突きあたるまで、神の眼に善しとされる路にゆき



倒れる人々の血と祈りとは続かなければならない。まことの終末的現実がこの路の一步一步に信じられねばならぬ。我々の路はかくも矛盾的な路面と危機的な斜面と終末的な視野を有つ。しかし、そこに本当の信仰と信頼と希望がある。

神は在まし給う。神はすでに啓示し給うた。我らの拠所は、今在まし、昔在まし、後来り給う主にある。主の大なる恩恵はすでに与えられている。啓示と恩恵は我らをかづける、生かす、信仰と真実とがその中で呼吸をする。

藤井先生が「真実」ということを言われたから、ここに「真実」と言っておられます。

驚くべきめぐみが私を抱いている。本当に「我らの信仰生活の始が恩恵であり、中が恩恵であり、終が恩恵である」。

我らは往かう！ この暗雲と深淵の狭間を。この狭間をして現実たらしむるは神の光あるのみ。聖国は来たらんとしている。我等は聖約を信する。

先生が黙示録を最後の盾とし歌とされたのは、かかる死の相に於けるいのちの歩みと祈りに於いてであった。悲痛なる祈祷、偉大なる讚美がそこにあった。私の想いは言をさげすむ。私の筆は折れている。

地の東よりまたは西より

おのおの己が十字架を負ひ

暇をつけてかれらは発った。

たどりし途は岨路よりも

なほかつ細く、門のうへには

録して「大いなる患難」とあった。(『羔の婚姻』下篇第十歌 棕櫚)《

これは藤井先生の『羔の婚姻』の中の一節です。こういうことで、藤井先生の記念の講演会ですから、そうやって藤井先生の歩まれた路というものが所々、顔を出しますけれども、そうでありつつ、先生はご自分の信仰を告白しておられる。それを私は、晩年の先生という立場から更にそれを補って、聖霊という本当に先生が晩年に体験された、

「もう十字架と聖霊の二つだ。十字架と聖霊は一つだ」

と、こう仰った先生の現実、それを私の現実とし告白として、今日はお話いたしました。はい、それではこれで終りましょう。

